

# 法華経の初期漢訳と流布の背景

シルヴィ・ウロー

蝶名林亮 訳

## 中国人の心をつかんだ法華経

今回のシンポジウムにお招きをいただき、そして、法華経についてお話しできることは、とても名誉なことです。といいますのも、この宝石のような文学作品は、極東アジア仏教において、最も重要な文献であるというだけではなく、その内容の多様性と複雑性から最も興味深い仏教経典の一つに数えることができるからです。漢訳の法華経が出版された直後からこの経典は中国の仏教徒の心をつかみ、その後幾世紀にもわたって

広く読まれ、また書写が繰り返され、さらには様々な注釈書がつくられ、経典の一部もしくは経典全てが石刻されたということすらありました。敦煌（現在の甘粛省内）で発見されたいわゆる「敦煌文書」の中には、実に四千以上の法華経の写本が見つかっています。また、法華経は画家や詩人など多くの芸術家たちにもその創作活動のためのインスピレーションを与えてきました。信仰者が法華経に対して抱いてきた崇拜の念は、たとえば三車火宅の喩え、譬中明珠の喩え、三草二木の喩えなど、その文学的な内容の美しさ、そして深さに

よるところが大きいことは言うまでもないでしょう。しかし、それだけではなく、小乗〔原文 Hinayana〕の教えとは衝突するような文言の存在、たとえば、釈尊を殺そうとした彼のいとこ（提婆達多）の成仏を約束していることを挙げることもできるでしょう。さらに観音菩薩がその名を呼ぶ者を守護すると書かれた章があること、その他にも様々な要因があると思われまます。

他の大乘経典と同様に、法華経もまた、法華経自体を称賛し、この経典自体の崇拜を信仰者に求めまます。

すなわち、この経は、それを信じる人たちに對して、受持し、読誦し、そして書写することを求めまます。この経は、この経自体を守り、そして流布する人たちの守護を約束し、その人たちの功德を約束してまます。このことが、経典の読誦に人生を捧げることを決めた僧や尼僧たちが、法華経を選んできた理由なのかもしれません。たとえば、五世紀後半には、現在の南京近くの人里離れた寺で三十年間にわたって毎日、法華経全編の読誦を繰り返した僧がいました。また、四世紀には一生のうちに三千回も法華経全編を読誦した尼僧

もいました。

— 経典読誦という修行に専心した初めての僧も、常に法華経を読誦したと言われています。その僧は、ある夜、土地の神のもとに行って法華経の読誦をしてほしいとひそかに依頼され、三カ月間の法華経の読誦を行いました。これに感謝した土地の神が、たくさんのお絹や一頭の白馬、何頭かの羊を与えたといまます。

### 竺法護の訳経活動

法華経の最初の漢訳者である竺法護は、伝記によれば、三世紀前半に生まれたとされています。シルクロードの拠点であったオアシス都市・敦煌に数世代にわたって根を張っていたインド・スキタイ系の一族の出身だったとされています。

つまり、彼にとつて中国語は母国語でした。八歳の時に出家しましたが、これは当時、出家できる最年少の年齢よりも一年だけ後の出家だったということになります。彼は、その地方の仏教僧の慣例通り、中央アジアへ修学の旅に出て、ある地で師について学び、さ

らに他所で別の師からも教えを受けました。伝記によると、竺法護は修学の旅から戻った時、遍歴した諸国のあらゆる言語を話し、また書いたといえます。伝記では三十六の言語を習得していたとされていますが、ジャン・ノエル・ロベール (Jean-Noël Robert) が指摘しているように、実際にはもっと少ないと思われる。

当時の中国人は、中央アジアには三十六の国があると考えており、竺法護の伝記の作者はそれぞれの国に異なる言語が存在していると考えて、このように書いたのだと思われる。それらの言語は全て死に絶えてしまいました。中国やアフガニスタン、パキスタンなどの仏教遺跡で発見された経典や碑文などから、そのうちの一部をわずかに伺い知ることが出来ます。すなわち、クチャ語、ガンダーラ語、ソグド語、コータン語です。

帰国した竺法護は、まず敦煌に戻り、次いで長安（現在の西安）へ入り、そして洛陽に腰を落ち着け、二六七年から三〇八年にかけての約四十年間、ほとんど絶えることなく翻訳事業に取り組みました。ただ、この間

に彼が翻訳事業を中断した期間が十一年ありました。彼がその期間に何をしていたのか、わかっていません。ある研究者は、彼の伝記に基づいて「山林で修行していた」とし、これとは別に、「自身の中国語能力の強化に励んでいた」という説もあります。

彼が行った翻訳は相当な分量があります。彼自身が持ち帰ったものや、翻訳のために彼のもとに持ち込まれたものなどを含めると、竺法護は三百巻以上、百五十を超え大乗・小乗の経典を翻訳したとされています。彼が訳した多くの経典は、それまで中国語圏で知られていなかったものでした。彼の訳業により、積尊の人生や過去世、修行方法、教え、儀典方法など、様々な新知識が中国にもたらされました。

彼によって初めて漢訳されたのは、法華経のほか、懺悔の方法が書かれた経典、仏教的な宇宙観が書かれた経典、未来仏・弥勒について書かれた経典、在家信者・維摩詰について書かれた経典などです。つまり、その後の中国仏教の思想と実践の発展において中心的な役割を担った様々な経典が彼によって訳されたこと

になります。

翻訳された経典の序文や跋文から、彼をサポートした人たちの存在も含めた翻訳事業の概要を伺い知ることが出来ます。翻訳者として名前が挙がるのは竺法護だけです。当時の翻訳は通例、複数の人々によって進められ、それぞれの役割をもって作業は進められていきました。

このような中で竺法護の役割は、経典を読み、それを口頭で訳し、さらに解説し、場合によっては質問にも答える、というものでした。一人もしくは二人以上に彼の解説を書きとめる役割が与えられており、それをもとに漢訳の素案が作成されます。最後に、複数の人からなる校正チームが素案をチェックして最終稿へと仕上げている、これを書写して回覧します。法華経の場合もそうでしたが、この過程を経て出来上がった最終稿に、さらに修正が入る場合もありました。

竺法護の翻訳チームには十七人が名を連ねています。そのほとんどが、インド、カシミール、ホータン、パルティア、ソグド、クチャ（亀茲）など中国本土以外の

地域の出身者です。このことは、竺法護が翻訳事業を行った都市の国際性を表しています。敦煌はシルクロードにおける典型的な規模のオアシス都市であり、長安も古代から中国の都であり、洛陽はその当時の都であったわけです。また、彼の翻訳チームの主要メンバーと書記は在家の人々でした。

『正法華経』のある跋文には翻訳に関わった十名の名前が記されています。そのうちの三名は公式の書記役、五名はおそらく書記役を助ける役割、残りの二人は校正者でした。校正役のうちの一名のみが僧であり、他の翻訳参加者は皆、在家の人々でした。<sup>(1)</sup>

また、跋文によると、竺法護は口述による翻訳を三週間で終えたとされますが（二八六年の九月十五日から十月六日まで）、これは法華経の分量を考えると非常に短い期間です。そして、最初の校正作業は一年半後の二八八年の三月二十五日に終わったとされています。<sup>(2)</sup> 彼の説明によると、竺法護は最初の漢訳作業終了後の二年後、断食修行と説法を聞くために集まった在家の聴衆に法華経の講義をする際に、出来上がっていた漢訳

に再度、修正を加えたとされています。

### 鳩摩羅什の訳経活動

竺法護が渾身の力を注いだ『正法華経』だったわけですが、鳩摩羅什による歴史的な名訳『妙法蓮華経』が現れると、その影が薄くなっていきました。土地の神に対する法華経読誦の話や、法華経全編を生涯に三千回読誦した尼僧などのエピソードでの法華経は『正法華経』であり、これらの物語が語られる際に『正法華経』が言及されることはありませんが、その頻度は鳩摩羅什訳の法華経とは比べ物にならないほど低いものです。

仏典漢訳における四大訳経家の中<sup>(3)</sup>でも最も偉大である<sup>(3)</sup>と見なされている鳩摩羅什は、現在の新疆ウイグル自治区のオアシスの国・亀茲(クチャ)国で、四世紀の中頃に生まれました。当時、亀茲国は中国からの独立を保っていた王国であり、住民はインド・ヨーロッパ系のトカラ語(トカラ語B方言=クチャ語)を話していました。

竺法護とは違い、鳩摩羅什は中国語のネイティブスピーカーではありませんでした。彼の父はインド系の人であり、母は亀茲国の王の妹でした。彼は七歳の時に出家し、二年後、高名な教師たちのもとで修学するため、当時の仏教の中心地に向かって、母親と一緒に旅立ちます。カシミールへ、また、おそらくはガンダラへ、さらにはカシユガルへと。

五年後もしくは六年後、鳩摩羅什は亀茲国へ戻り、そこでさらに修行を続けましたが、この小国は中国の侵攻を受け、三八四年、その支配下におかれました。一年後、侵略軍は王宮で略奪を行い、中国本土へ引き上げていきました。史書によると、侵略軍は戦利品として、動物、楽器、信仰の対象たる宝物、刺繍がほどこされた美しい織物、彫像など、合わせてラクダ二万頭分の宝を持ち去ったとされます。

彼らは王国にいた芸術家や文化人たちも、戦利品の一部として連れ去っていきました。鳩摩羅什もその一人でした。彼は二度と母国へ帰ることはできませんでした。この亀茲国侵略について、一つの伝説が語られ

るようになりしました。鳩摩羅什の伝記など幾つかの仏書によると、中国の権力者の龜茲国侵攻の真の目的は、鳩摩羅什を都・長安へ連れ帰ることであったということです。より信頼のおける歴史的文献によると、中央アジアの関門に当たたる龜茲国の明らかな地政学的重要性から、この豊かな王国を自らの領土に加えようとしたとされています。<sup>(5)</sup>

しかしながら、鳩摩羅什が、彼を連れ去るよう命じた君主〔前秦の皇帝・苻堅〕と会うことはありませんでした。侵略軍が中国へ帰還する途中で、本国にいた君主は殺されてしまい、彼の国も転覆されてしまったからです。鳩摩羅什は侵略軍の将軍が拠点として腰を落ち着けた涼州（現在の甘粛省内）に十六年の間、滞留させられました。中国語を学んだこと以外に、この十六年の間に鳩摩羅什が涼州で何をしていたのかは不明です。彼を捕らえていた将軍は仏教には関心がなく、鳩摩羅什を（政治的な）助言者として、ときには吉凶を占う相談役として遇していたようです。この時代について、鳩摩羅什の弟子たちは、師は「升の下に灯火を

隠していた」と婉曲的に表現しました。それから十六年後、彼が逗留していた涼州が中国の他の支配者に占領された後の四〇一年から四〇二年にかけての冬に、鳩摩羅什は長安に移りました。

長安で鳩摩羅什は、仏教徒の活動を奨励し支援する新たな支配者（後秦の皇帝・姚興）一族に出会います。そこには多くの仏教寺院があり、また經典の翻訳者たちがいました。皇帝の一族の中には翻訳作業に積極的に加わる人々もいました。それだけでなく、なにより重要であったのは、長安には既に十五年もしくは二十年の間、翻訳事業を経験してきた僧たちがいたことでした。このような環境に恵まれて、鳩摩羅什は、死までの十年間にわたる大規模な翻訳事業を直ちに開始できたのです。

彼は長安に到着してわずか一週間後に、翻訳作業を開始しています。そこには、禪定修行について説いた經典も含まれています。これはそれまで中国にはなかったものでした。彼は約三十の經典を三百巻近く漢訳しました。そのほとんどが大乗經典でした。三百巻

という数は竺法護の翻訳事業に近い数ですが、一卷の長さなどの違いに注意を払ったうえで比較しなければなりません。鳩摩羅什が翻訳した經典は、一部を除いて、そのほとんどが中国語に翻訳されたことがなかったものでした。

また、竺法護の漢訳經典とは違い、鳩摩羅什の漢訳經典はそのほとんどが失われていません。同じ五世紀の時点で比較してみると、竺法護の漢訳經典は六十点が既に行方不明になっていましたが、鳩摩羅什の漢訳經典は二つしか失われていませんでした。

『妙法蓮華經』に加えて、鳩摩羅什の漢訳の中で大変によく知られていて、そして中国だけではなく東アジア全体の仏教の方向性に強い影響を与えた經典として、『金剛般若經』などの般若經典、『仏説阿弥陀經』、『維摩詰所説經』、そして中觀派の論書などがあります。また、それほど広く知られてはいませんが、種々の禪定修行についての經典や弥勒仏の未来の下生について書かれた二つの經典を紹介したことは大変に重要です。

さらに、鳩摩羅什はそれまで紹介されてこなかった、

仏教教団の規律に関する二つの重要な文献の漢訳に助力しました。その一つは教団の律のリストで、修行者によって月に二度読み上げられ、それが守られていない場合は懺悔が課せられるという内容のものでした。二つ目は仏教徒が従うべき規則が書かれたもので、どんな規則があるか、どのようにそれを遵守すべきか、どのように生活し、儀典はどのように行うべきか、修行者のコミュニケーションはどのように構成すべきか、といったことが説明されています。さらに、釈尊がこのような規則を設けるに至った経緯も説明されています。

鳩摩羅什が長安に到着する少し前に、十五人の中国僧たちが、このような文献を求めてインドへ旅立っていきました。このうちの三名だけが生きて中国に戻ってきましたが、不幸なことに、鳩摩羅什がこれらの律書を漢訳してから十年後のことであり、彼らが命がけで持ち帰った經典が鳩摩羅什の漢訳のような影響力をもつことはありませんでした。

鳩摩羅什の仕事全体を通して、その大部分は大乗經典の翻訳であり、彼は当時中国で失われていた大乗文

献への関心を再び喚起することを目指していました。実は、彼が中国に来る十五年前、主にカシミアールから来た伝道僧たちが長安へ到着し、多くの小乗文献を翻訳しました。そのうちの一つは、大乘文献を悪魔のものとまで言っていました。このような背景を考えると、鳩摩羅什の翻訳事業は中国における大乘仏教に新たな命を吹き込んだことがわかります。

鳩摩羅什は何より經典の漢訳者として歴史に名を残しているわけですが、それだけでなく、彼の生き方や人間性も、後の中国仏教に影響を与えました。彼は仏教僧を世俗の有力者に巧みに接近させることに苦心し、その上で、仏教側の独立性を守りました。彼は仏典への真の情熱を世俗の権力者と分かち合えた最初の仏教僧であり、両者の間には誠実な友情が結ばれていたと想像できます。

それと同時に、鳩摩羅什は、身の回りの世話をする二名の僧とともに公の場から引退したいと君主に願い出た最初の僧でもありました。彼がどのように死を迎えていったのか、はっきりしたことはわかっていませ

ん。わかっているのは、病を得てほどなく亡くなったということですが、仏教研究者の塚本善隆氏は、鳩摩羅什の死因は脳溢血だった可能性を指摘しています<sup>(7)</sup>。伝記によると、彼が火葬にふされた後に、遺灰の中から奇跡的に焼けずに残った舌が見つかったとされます。このことは、中国の地で死んだ僧の遺灰から焼けずに残ったものが見つかったとされる初期の事例のひとつです。

鳩摩羅什の伝記をよく読んでみると、鳩摩羅什自身が訳した『大智度論』〔摩訶般若波羅蜜經〕の注釈書〕に次のような予言が書かれていることに気がつきます。それによると、般若經典を誦すること、舌が何物にも破壊されないような強さをもつようになり、火葬しても焼け残るといのです。

#### 406年、『妙法蓮華經』を訳出

今日のこのシンポジウムは鳩摩羅什を讃えるためのものではないので、彼が中国仏教全体に対して果たした貢献についてはこれ以上議論いたしません、法華

經の漢訳者としての彼の役割に焦点を絞って、ここからお話しいたします。

經典翻訳者として鳩摩羅什がおかれていた状況は、竺法護のそれとは以下の点で異なっていました。それは、鳩摩羅什が長安に到着した時に、彼は中国語で自らの考えを述べることは確実にできたはずですが、中国語の知識はまだ完全ではなかったという点です。<sup>(8)</sup>

それに加えて、鳩摩羅什はまだ翻訳の経験がなかったことも竺法護との相違点として挙げられます。そのため、彼は翻訳作業を補佐する人たちが彼に対してどのようなことを期待しているのかわからず、また原典に忠実であるよりも、なるべく簡明に翻訳するというスタイルをもっていました。ともあれ、彼の中国語の著述力も不十分なものであり、彼が翻訳作業の中で果たせる役割は、經典を読み、解説することに限定されていました。彼の解説を、書記役が伝統的な翻訳作業の方法に則って記録していったのです。

彼の翻訳した文献の序文や跋文には四名または五名

の書記役の人物の名前が書かれています。彼らは全員僧侶であり、このうちの二名が特に重要な役割を果たしたと思われます。翻訳作業に携わった人の数が竺法護のそれと比べて少ないことについては、鳩摩羅什の翻訳作業は長安でのみ十年間だけ行われたものであった一方で、竺法護の翻訳は四十年という長期間にわたって様々な場所で行われたということから説明できます。

〔鳩摩羅什の中国語が完全ではなかったとはいえ〕彼が、若い修行僧や学僧、皇族も含めた様々な階層の多くの聴衆、多い時では数百人の集った場所で、經典を解説しつつの訳出や読解を行ったことは厳然たる事実です。<sup>(10)</sup> 法華経翻訳の場合も同様で、彼はそれを四〇六年の夏に八百人の聴衆の前で行ったとされます。彼が長安に来てから三年半経った時でした。その時点までに彼の中国語の流ちょうさは大きく進歩しており、彼の雄弁が聴衆を魅了するのに十分なレベルに達していました。鳩摩羅什の翻訳作業は、竺法護の訳を訂正・改良・改訂しつつ、行われていきました。

## No Image

### 法華経読誦による奇跡譚

この発表の冒頭で、私は法華経が広く流布した原因について、その内容の美しさと深さ、加えて経典自体

鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』写本（複製）。新疆ウイグル自治区のベゼクリク千仏洞で、1980年代に「観世音菩薩普門品」の部分が発見された（写真はその後半。トルファン博物館蔵）。末尾には建昌5年（西暦559年）に比丘・義導が書写したと記されており、鳩摩羅什の翻訳からわずか153年後という極めて貴重な写本である。中国の国家一級文物（日本の国宝に相当）

が読誦を修行方法として勧めていることを挙げました。しかしこれだけが要因ではないかもしれません。法華経の漢訳が現れたすぐ後に、法華経信仰によって得られた奇跡を集めた書物が中国に現れました。「志怪小説」と呼ばれるそれらの物語には、法華経読誦によって重い病が治った話や、「法華経に登場する」観音菩薩に危難から救われた話などがあります。水難、難破、死刑の危機からの脱出などです。また、ある信者は経典に登場する菩薩を実際に見て、会うという体験をし、死後、天人の中に生まれたが、それは法華経を讀み、誦し、書写し、信仰したことによる功德だったといえます。

仏僧の伝記の中にもこの類の奇跡物語が登場します。ある僧が、野生の動物や亡霊、靈魂などを鎮めるために、夜ごと法華経を誦していると、それを聞こうと神々が集まってくるのを近隣の人々が目撃するといった話です。この種の物語は、法華経の漢訳が出回った直後から現れており、その後何世紀にもわたり、新たな物語が追加され、増加しながら、口から口に伝わったり、

書きとめられていきました。その結果、このような「志怪小説」や奇跡集は幾つも現存しています。そこには法華経や、観音菩薩などその主要登場人物に直接的・間接的に言及した物語も含まれています<sup>(1)</sup>。僧侶や在家の信仰者が困難に直面するなか、どのように観音菩薩に祈り、どのように救われたのか、また法華経の流布に貢献した行為の結果、どのように病が癒えたか、といった物語です。

最後に、この種の物語の一つを仏僧の伝記集から紹介したいと思います。五世紀のことです。現在の南京から来た四十歳の男が出家しました。彼は菜食に徹し、質素な身なりのまま、一心に法華経を誦する修行をし、疲労困憊の極みに達しました。体が弱かったために、彼は何度も病に倒れました。この僧はそれが自身の悪業によるものであると気づき、過去の罪障を消滅するために法華経を百回書写する誓願を立てました。ところが、この誓願を果たしても、病は少し良くなっただけでした。そこで彼は、やはり法華経全巻を誦する修行を完遂しなければならぬと悟り、それを実行に移

します。すると、彼の病はたちまちに癒えたのです。伝記にはこのような法華経読誦の功德が描かれています。

〔 〕内は邦訳に際しての補注

#### 訳注

- (1) 『正法華経』の翻訳については各種の説明があり、『歴代三宝紀』巻六、『大唐内典録』巻二、『貞元新定釈教目録』巻三などにも言及がある。『出三蔵記集』に収められている「正法華経記第六」には以下のような記述がある。「太康七(二八六)年八月十日、敦煌から来た月氏の菩薩沙門竺法護が、西域の經典を手に執り、口述して『正法華経』二十七品を訳出し、優婆塞の聶承遠に授けた。張仕明・張仲政が共同で筆記し、竺徳成・竺文盛・嚴威伯・続文承・趙叔初・張文竜・張長玄らはともに後援し歎喜した(中略) 天竺の沙門竺力・龜茲の居士帛元信とともに(訳文を) 検校し(政略) 〔『出三蔵記集 序卷訳注』中嶋隆藏(編)、平楽寺書店、一九九七年、一二四頁)。
- (2) 挙げられている年月日は西暦に換算したものである。中国の暦では、翻訳作業と校正最終日は、それぞれ「太康七

年八月十日から九月二日」「太康九年二月六日」となる。

(3) 四大訳経家とは、通例、鳩摩羅什(三四四―四一三)あるいは三五〇―四〇九、真諦(四九九―五六九)、玄奘(六〇二―六六四)、不空(七〇五―七七四)を指す。なお、鳩摩羅什の生没年については諸説ある。

(4) 龜茲国は、音楽が盛んなことで有名であった。龜茲楽は中国音楽に、また日本の雅楽にも大きな影響を残している。

(5) ここで語られている中国による龜茲国への侵攻とは、前秦の皇帝・苻堅に命じられた將軍・呂光による西域侵攻である。龜茲国侵攻の真の目的が鳩摩羅什の獲得であったという記述について、『高僧伝』の鳩摩羅什の伝記にはこうある。「出発に臨んで、苻堅は建章宮で呂光の送別の宴を催し、呂光に言った。『(中略)朕は西国に鳩摩羅什がおると聞いている。法相を深く理解し、陰陽の術に熟達し、後学の徒の模範である。朕は慕わしくてならぬ。賢者哲人は国の大宝である。もし龜茲に勝利すれば、ただちに駅馬を馳せて羅什を送り届けよ』」(『高僧伝(一)』、岩波文庫、吉川忠夫・船山徹(訳)、一六〇―一六一頁)。

(6) 「升の下に灯火を隠していた」《……avait gardé sa lampe sous le boisseau》とは新約聖書に説かれるイエスの言葉による。「もし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではな

いか。隠れているもので、あらわにならないものはない。秘められたもので、公にならないものはない」(マルコによる福音書4:21-22、新共同訳)などである。鳩摩羅什が涼州で過ごした時期は、「升の下の灯火」のように、能力の真の輝きを發揮させる機会がなかったことを指している。

(7) 塚本善隆「鳩摩羅什の活動年代について」(『印度學佛教學研究』三一―二、二二六頁)を参照。

(8) 前掲『高僧伝(一)』には、長安に来てから「次第には中国語もうまくなり」(一六九頁)とあり、鳩摩羅什には中国語強化の必要性があったことが伺われる。

(9) 訳経に関わった人物などによって、経の内容や訳経の様子について書かれている場合がある。『妙法蓮華経』の場合、『出三藏記集』所収の「法華宗要序」「法華経後序」などがある。

(10) 前掲『高僧伝(一)』に、鳩摩羅什が『大品般若経』を訳出した際には八百人以上の人々が訳経に参加したとの記述がある(一六九頁)。また、前掲『出三藏記集』には「維摩詰経序第十二」に、鳩摩羅什の『維摩詰所説経』の訳出にあたり千二百人の沙門が参加したとの記述がある(一三八頁)。このように大人数の人々が参加して訳経が行われるというスタイルは、六朝時代まで多くみられた(船山徹「仏典はどう漢訳されたのか」岩波書店、二〇一三年、五六頁)。

(11) 法華経説誦の功德譚をまとめたものが多いが、その一

つに『弘誓法華伝』（『国訳一切経』、史伝部十七、大東出版、二〇三―三二八頁に収録）がある。

Sylvie Hureau / パリの高等研究実践学院 (Ecole pratique des hautes études) 講師 (中国仏教)。フランス国立東洋言語文化研究所 (Institut National des langues et civilisations orientales) で博士号を取得。仏典、儀礼、修行、僧侶伝などの歴史研究に取り組む。

(訳・ちようなばやしりよう / 東洋哲学研究所研究員)